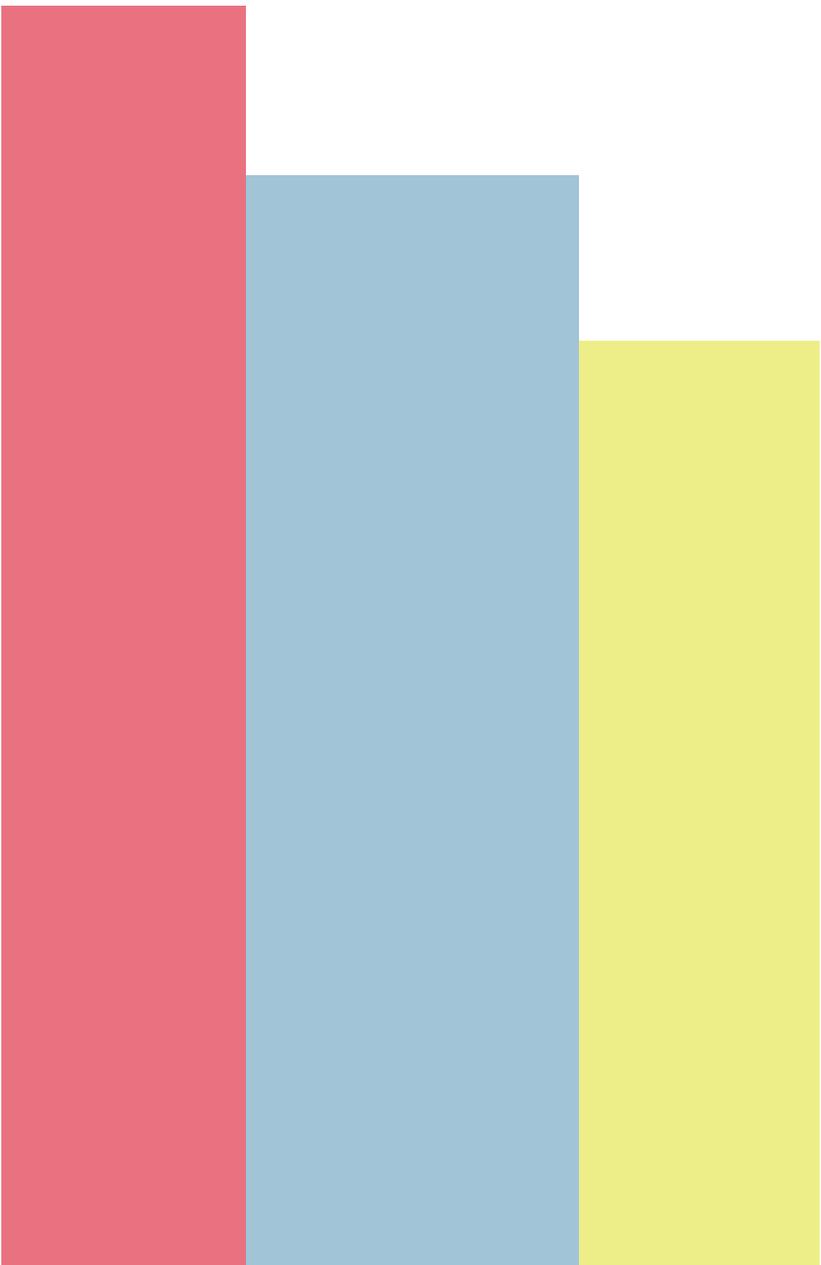


神吉研究室

釜山調査旅行

2019.9.24-26



# 目次

はじめに	中村文彦	3
<b>9月24日(水) / 1日目</b>		<b>4</b>
甘川文化村 / Gamcheon Cultural Village	大橋茉利奈	
チャガルチ市場 / Jagalchi Market	清山陽平	
今日の釜山めし	雨宮美夏	
写真帖	新靖雄	
<b>9月25日(木) / 2日目</b>		<b>9</b>
貞蘭閣 / Jeongnangag	高山夏奈	
臨時首都記念館 / Provisional Capital Memorial Hall	山口直人	
臨時首都政府庁舎 / Dong-a University Museum	新靖雄	
Kiswire Center	新靖雄	
F1963	久保田匠慶	
海東龍宮寺 / Yonggungsa Temple	中村文彦	
映画の殿堂 / Busan Cinema Center	大橋茉利奈	
今日の釜山めし	雨宮美夏	
写真帖	新靖雄	
<b>9月26日(金) / 3日目</b>		<b>19</b>
草梁イバグギル / Choryang Ibagugil	中村文彦	
今日の釜山めし	雨宮美夏	
写真帖	新靖雄	

# はじめに

本研究室では毎年恒例で、国内あるいは東アジア各地を訪ねる調査旅行をおこなっている。

神吉先生の大学時代の友人である韓国出身・田泰宇（Jeon Tae-woo）先生のつてもあり、今年度は韓国・釜山への旅行を開催する運びとなった。

この冊子は、今回の調査旅行で訪れた場所々々で各自が抱いた雑感をとりまとめたものである。

旅行中の臨場感、あるいは釜山の諸風景そのものが読者の皆様に多少なりとも伝われば幸いである。



東亜大学博物館にて田先生（前列中央）を囲んで

田先生には旅行前から大変お世話になった。旅程決めの際には多大なアドバイスをいただき、見学場所やバス、食事の予約までしていただいた。旅行中も案内役として、現地の人だからこそ知っている裏事情を流暢な日本語で説明してくださり、ただ旅行するだけでは得られない、深い学びがあったように思う。田先生にこの場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。

（なかむら・ふみひこ）

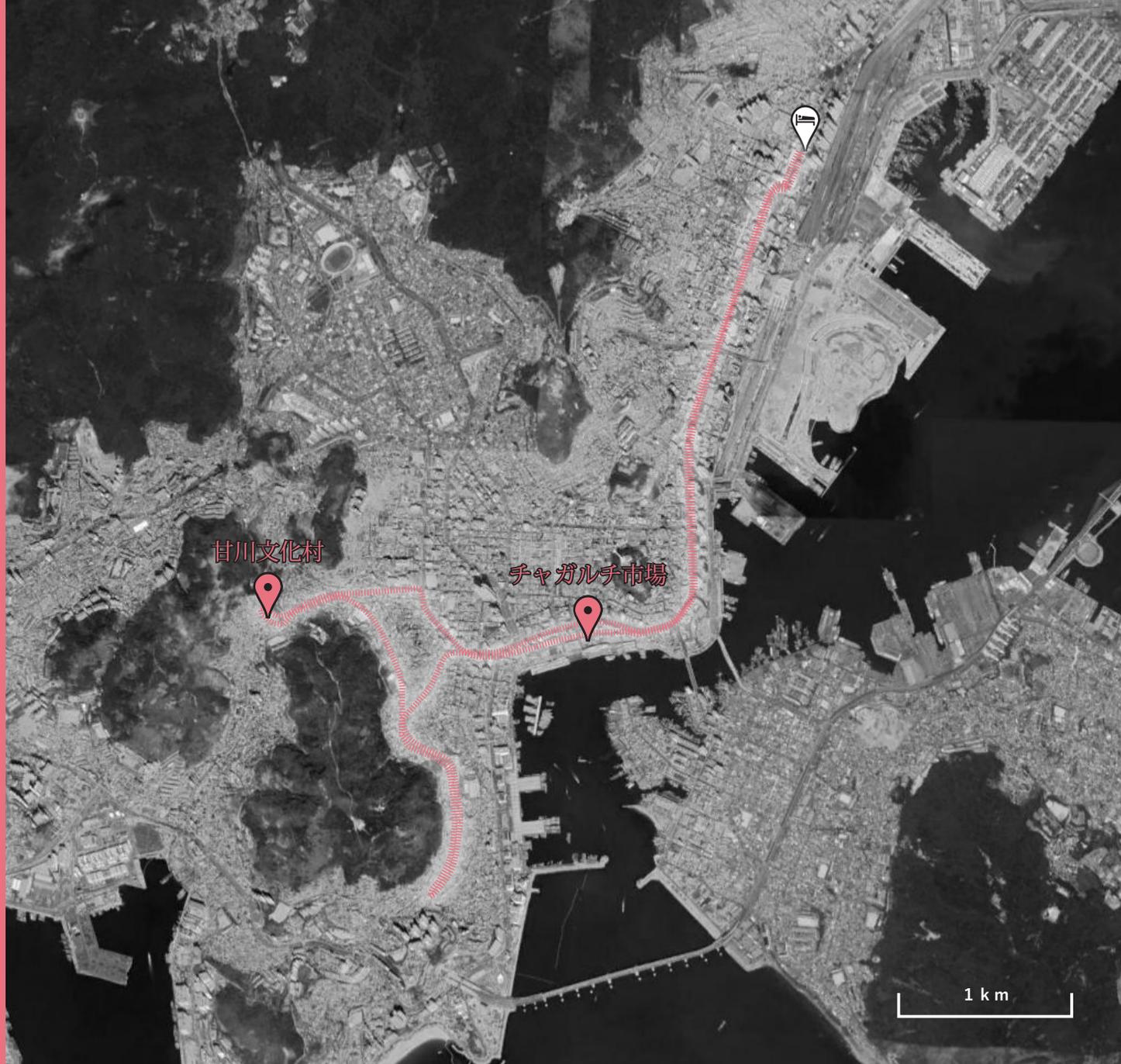
神吉研究室  
釜山調査旅行

— 旅程 —

9.24 (火)

- 10:50 関西国際空港発
- 12:35 釜山国際空港着
- 14:00 ホテル着  
昼食
- 15:30 甘川文化村
- 18:00 チャガルチ市場  
夕食  
以降自由行動

DAY 1



## Gamcheon Cultural Village 甘川文化村

### DATA

Keywords：集落、朝鮮戦争、インスタ映え

設 計：

Since：1950

住 所：釜山広域市 沙下区 甘川洞



甘川文化村は韓国のマチュピチュという異名も持つ観光地だ。そこへ向かう道中で私たちがまずたどり着いたのは斜面に建つ集落だった。狭い階段を登れど登れど迷路のような路地と住宅が続いた。その細く迷路のような道は私に釜山旅行の2日前までいたインドネシアのカンポンを思い出させた。細い道に溢れ出している生活用品、家の上に積まれている水のタンク、家の前で食事をとる人々。カンポンの暮らしが斜面に立体化して現れていた。さらには屋上で井戸端会議に遭遇(写真右)。みなさんあたたかく迎えてくださった。ここでは斜面に家が並ぶため、屋上空間が空へ続くヴォイドとなっているように感じた。ここまでは甘川文化村までの集落であり、文化村

に到着するとそれまでの住宅地の雰囲気とは変わって一気に観光地の賑わいが見られた。文化村を一望できる写真スポットには人が集まり、カラフルな家々をスマホに収めていた(写真左)。私はこのインスタ映えとなっている集落にどんな感想を持てばいいのかいまいち分からなかった。しかし横にいた先生の「この特徴がカラフルな色としてまとめられて、細部や生活が見えづらくなっているね」という言葉で少し腑に落ちた気がする。私が今まで日本やジャカルタで感じた住宅地に感じた魅力は道端でおしゃべりしてる人や、洗濯物、生活が垣間見える瞬間だったのに、インスタ映えの集落をこの距離で楽しむことはあまりに表層的では無いかと思った。そんなことを思い

ながら散策を始めて近づいてみると、先ほどの集落と同じような生き生きとした空間が見られた。朝鮮戦争の際にこの斜面に疎開したという歴史を持つこの町も、ビビッドな色に塗ることによって観光地として活気のある町となった。活気があることはいいことであり、観光がこの町の産業になることはいいことだと思う。しかしこの村には朝鮮戦争の重い歴史を乗り越えた結束力や密集地ならではの空間的魅力がまだまだ潜んでいるはずだ。インスタのカメラ越しには映らない、その向こう側の魅力に気づいていきたいな、と思いながらシャッターを切った。

(おおはし・まりな)

# Jagalchi Market チャガルチ市場

傾斜に溜まるアジュモニの熱

—チャガルチ市場から風俗街へ

## DATA

Keywords：市場、風俗街、都市周縁部

設計：

Since：1924年 / 1911年

住所：釜山広域市 中区 南浦洞4街 / 忠武洞3街

釜山の初日、チャガルチの市場ビルにて夕食を食べる。巨大な一階の市場空間、景気よく料理を運ぶ店員、歓談する地元客たち（元気な<sup>アジュモニ</sup>아주머니（おばちゃん）がとても多い）の熱に圧倒されつつも、新鮮な魚介を安価にいただいて頬はゆるむ。最終日には土産物を探しつつ朝の市場を一人歩く。海沿いにどこまでも続く露店にはたくさんの魚介類とやはりたくさんのアジュモニである（写真左）。ここでも一昨夜と確かに同じ熱が蒸した海風によって体に纏わる。

市場の始まりは1924年開設の南浜市場である。日本居留地が設置された草梁を中心とした釜山開港（1876）以来の市街地は、日韓併合（1910）を経、日本人を含む人口急増を背景に臨海部の埋立てを伴って拡大する。しかし現在感じるこの熱はむしろ、朝鮮戦争（1950）以



降に大量流入した避難民による露店群「チャガルチ魚貝類処理場」に由来するものだろう。当時すでに市街化し切っていた釜山の狭域な平地から溢れ、山の斜面地や海ぎわに場所を求めた彼らの熱である。

さて市場から山側に歩を向ける。すぐに10mほどの段を上り、広めの道を渡ると飾り窓の一带に入る。もう真上近くなった日に照らされ、かえってまちは静かである。しかし4階建の古ぼけたビル群は大きな「窓」越しに一階の暗い室内をみせ、白くてかりのある内装材や同規格の丸スツールが並ぶ様子がかすかに夜の盛りを匂わせる。日本統治時代は緑町と呼ばれる遊郭であったこの一帯では、区割りに従い整然と並ぶ飾り窓ビル群のすぐ背後に斜面地の密集住居群が覗かれ、かつて都市のエッジであったことを物語る。ここでも、



いざ窓に明かりが灯れば強気に迫ってくるのだろう客引きのアジュモニが、いまはしかしただ気怠そうに竹む。風俗街のほとぼりを感じながら、馴染みある海風にふと振り返れば、先の市場や海までを一気に見通す風景である（写真右）。

草梁周辺と比べてもとりわけ山と海が近い港湾都市釜山の南西周縁部において、平地から離れ急激な高低差にとりつくように市場や風俗街の労働者（特にアジュモニ）の熱が滞留している。時代を超え持続し、現代の都市生活者を支え観光客を魅了する圧巻の熱量を通り抜けた午前中の小郊行と、湿度に滲むその濃密な行程を急傾斜ゆえに一日に俯瞰する、何気ないビル間の風景が忘れられない。

（きよやま・ようへい）



釜山につくとまず昼食をとった。大通り沿いの店は地元の利用が多そうな飾り気のない佇まい。辛いかな否かのほぼ2択のメニューから注文を決める。ミルミョンの麺は、細いが食べ応えある固さで、辛いタレによく味が絡み、箸が進む。やがて辛さが累積してきて、別添えの氷の浮いたスープを足すと、出汁の甘味でがらりと味が変わって食べやすくなった。

今日の  
釜山  
めし

ー昼食ー

ミルミョン (冷麺)

たくあんときゅうりの漬物 (付け合わせ)

シュウマイ

ー夕食ー

タコの踊り食い

ヒラメの刺身

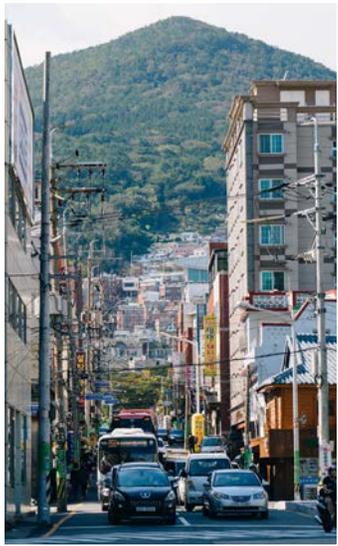
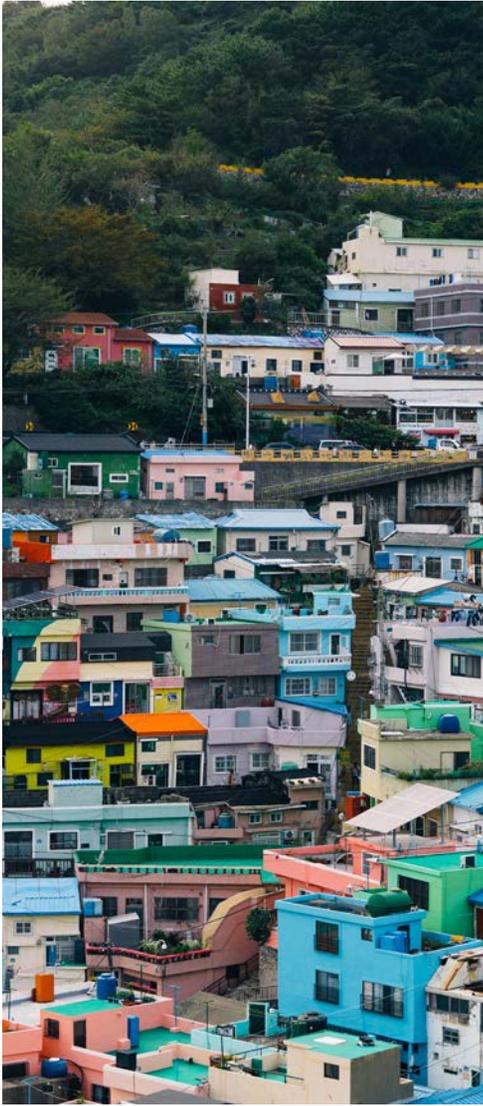
白身の焼き魚

アナゴの天ぷら



夕食はチャガルチ市場の二階にて、おじさんの、色々出して2000円くらい、との日本語の客引きにつられた。仕入れに拠るだろうメニューはどれも新鮮だった。のたうつタコの足は口の中で吸盤がぷちぷちと弾ける。海を泳いできた筋を感じるヒラメの刺身。これをエゴマでまくと、風味が加わりヒラメの甘さがさらに引き立つ。ぱりぱりに焼けた焼き魚の皮を裂けば、中の身離れはよくふっくらしている。塩味が全身にのった脂の旨味に重なり、とても幸せだった。

(あめみや・みか)



神吉研究室  
釜山調査旅行

— 旅程 —

9.25 (水)

- 09:00 ホテル発  
田 (Jeon) 先生と合流
- 09:30 貞蘭閣
- 10:00 臨時首都記念館
- 11:00 臨時首都政府庁舎
- 12:00 旧東萊駅  
昼食
- 13:00 Kiswire Center
- 14:00 F1963
- 15:00 海東龍宮寺
- 16:30 釜山市立美術館
- 17:30 映画の殿堂
- 18:00 新世界百貨店  
夕食
- 22:00 ホテル着



DAY 2

Jeongnangag  
貞蘭閣

## DATA

Keywords：日式家屋、登録文化財、カフェ

設計：不明（施主：玉田 穰）

Since：1943（2016改修）

住所：釜山市 東区 水晶洞 1010

京都の大学に通う以上、あるいは建築が大地を十分に埋め尽くした今、建築を学ぶ上で切っても切り離せないものが、「どうやって残すべき建築を残すか」ということではないだろうか。

二日目、まず訪れたのが貞蘭閣。ずぼらな私は何を見に行くのかもわかっていない。行きがけのバスで先輩の用意してくれた旅行のしおりを開くと、日式家屋でありカフェも兼ねていること、そして「入場料の代わりに飲み物をいっぱい注文するシステム」と書いてあった。

はて、沢山飲むように指示されるカフェとは？とっていると、訂正が入る。飲み物は「1杯」でよいらしい。

日本語らしい勘違いを楽しみながら釜山の街並



みを駆けて、バスが貞蘭閣に着く。降りるとまず目に入るのがどっしりとした木造家屋とレンガ造りのオンドルの煙突だった。

玄関をくぐると、券売機があって、1杯4000ウォンで韓国のお茶が飲めるらしい。各々楽しく選んで、スタッフの方に券を渡すのを横目に、私は勝手に室内を見て回っていた。

なにせ、やはり韓国の文化が半分くらいは意匠に現れるだろう、と思っていたのに、オンドル以外はまるきり日本式の建築に見えたのだ。

よくよく見てやっと、天井が高いこと、二階がスキップフロアのようにになっていること、日本のそれより木材に装飾が少ないことに気付くことはできた。でもやはり日本にいるような感覚になる。



不思議な感覚のまま、ひとしきり見て回ると、スタッフの方が花びらを浮かべたお茶をもってきてくれた。

田先生によると、修繕した後から文化財登録して修繕費を補填、いままこうしてカフェとして利用することで維持しているらしい。

日本でも、文化財を公開して拝観料を取ったり、町家をカフェに活用したりすることはままある。だが、貞蘭閣の場合は、お茶を飲んだらちょっと寄付したことになっている、というちょっと幸せな仕組みに支えられて残っていたのだ。

この1杯も何かの役に立ちますようにと思いながら、お茶を一口いただいた。

（たかやま・かな）

## Provisional Capital Memorial Hall 臨時首都記念館

### DATA

Keywords：歴史資料館、官邸、建物復元、韓国戦争、李承晩

設計：不明

Since：1926.08.10

住所：釜山広域市 西区 富民洞 臨時首都記念路 45



この施設は、当初、慶尚南道・道知事官邸として建設された。韓国戦争勃発による釜山臨時首都（1950-1953）当時は、大統領官邸として使われる。1983年に慶尚南道・道庁が昌原市に移転した後、1984年から臨時首都記念館として開館される。韓国戦争当時の写真資料等を展示する施設であり、2000年4月10日から2001年11月5日の建物復元工事の後、大統領官邸として使われた当時の館内構造や雰囲気も再現され、現在に至る。この辺の情報は記念館で手に入るパンフレットから得られる。日本語版も置いてあり、ありがたい。

建物は木造2階建て、外装はレンガ仕上げである。屋根は切妻。入口にかけて屋根が反っている

のが外観の特徴である。李承晩大統領夫妻が居住し、執務や国賓の歓迎が行われた歴史的に重要な施設であり、展示される調度品には気品を感じられる一方で、建物自体は割と簡素である。豪華な大空間などはない。各部屋は中廊下によって接続されているが、例えば居間、食堂、台所は廊下を介さず直接つながっている。また応接室と書斎も同様に直接つながっている。このような配置関係は廊下が緩衝空間として機能していたことを思わせる。パンフレットによると、2階にはショーケースが並んでいるということだが、僕たちが訪れた当日は、ショーケースはなくながらんとした広間だった。元執務室である板張りのその部屋は、広々として気持ちの良い部屋だった。奥には映像展示



があり、韓国戦争当時の様子をまとめた映像がこれまた日本語解説付きで閲覧できる。見知らぬ地を訪れる上で、こういった歴史的背景を概観できる機会はやはり重要である。

ちなみに記念館の裏には韓国戦争に関する展示館がある。こちらは1987年9月に釜山高等検察庁検事長公邸として建てられ、検察庁舎移転後、2002年に臨時首都記念館の一部となり、2012年の改装工事を経て、現在の展示館となっている。僕は記念館で時間を使い切ってしまい、展示館に行き損ねた。が、この辺の情報もパンフレットから得ることが出来た。今後訪れる方は、展示館も忘れずにご覧いただきたい。

（やまぐち・なおと）

# Dong-a University Museum 東亜大学博物館

(旧・臨時首都政府庁舎)

## DATA

Keywords：博物館、朝鮮戦争

設計：

Since：1923

住所：釜山広域市 西区 富民洞 顧徳路 225



この建物は、1925年日本統治時代に道庁として建設され、1950年-53年の朝鮮戦争時代には南下した韓国側政府の臨時政府庁舎として使用された。その後、道庁や釜山地裁、検察庁などとして利用された。2002年に、周辺敷地と共に、東亜大学が買い取った。都市型の開かれたキャンパスにし、建物自体の歴史性を残すため、博物館へと転用・改修された。

「この建築には、100年ほどこの場所に建ち続けている。」そんなことを感じさせる要素が、改修を経ながらも感じさせる部分が、多々存在した。

まず、外観だろう。二階建てのレンガ造りでシンメトリーになっている。その前には少し小さな車寄せとロータリー。吉田キャンパスの旧土木

工学教室本館や旧建築本館を思い出させられた。

そして、内装の変化、残され方も大きな要素の一つであるだろう。もともと部屋が並んでたであろう部分は壁が取り払われ、大きな展示スペースとなった。耐震補強なのだろうか、大きな中央の吹き抜けには鉄骨梁が見え、屋根裏部分にも大きな補強がなされていた。階段室部分は、バリアフリーのために、エレベーターが追加されていた。内装の素材も、古くなったレンガに加え、石のテクスチャや木のフローリングなど、現代的な博物館の要素が追加された。動線・展示・休憩室部分など用途に合わせて素材の混合具合がコントロールされていた。

中央部にしかない三階部分には、屋根裏の木造

の屋根架構を見せながら建物自体の歴史を掘り下げるような展示が行われていた。これまで、回ってきた博物館自体に感じた歴史性を答え合わせさせられるような感覚に襲われた。こうした明示的な展示は、大抵建物入ってすぐに良くあるが、奥深くで静かに示されていることに面白さを感じた。

保存建物の価値と変化を自ら感じ、想像を膨らませる行為そのものが、それらを知らせる以上に大事だと気付かせる、そんな空間と使われ方をしていた。

(しん・やすお)

# Kiswire Center

## DATA

Keywords : ワイヤー、張力構造

設 計 : 不明

S i n c e : 2013

住 所 : 釜山広域市 水営区 望美二洞 497

韓国一の線状鉄鋼メーカー Kiswire の製品や哲学を示すために作られたものである。簡単に言えば、ワイヤーをとりあえず使えるところには使って、色んな空間をつくるということだ。

正直、この建築で検索すると多く出てくるのがらせん状に上がっていくスロープで、それぐらいしか見所は無いだろうと思っていた。しかし、建築全体の架構から壁、階段といった構造部材だけでなく、目隠しなど細かいところの意匠としても使用されており、そんなとこまでワイヤーを使うのか、というぐらい使われていた。

テントほどの小さなものにしか使われていなかった張力構造は、ワイヤーの登場によって橋や大屋根などの巨大構造物を中心に使われるように



なった。

壁を突き抜け各構造をオーバーラップさせていくワイヤーや、一見無意味そうなワイヤーなど、様々な表情を見せていた。写真を見返しながら、「なんのワイヤーなのか、ただの意匠なのか」、全体を想像するだけでも楽しい。

一種単純な張力構造を中心に、建築の構成や構造を考えさせられると、構造畑の人の建築の楽しみ方を味わえる。

建築は、建築計画だけでなく構造や空調、設備など様々なものに関わる。ネットにある写真などでは到底伝わらない、複雑な絡まり合いによって成立する空間がそこにはあった。ぜひ、実際に訪れて体感してほしい。 (しん・やすお)



## F 1 9 6 3

## DATA

Keywords : CULTURAL COMPLEX

設 計 : BCHO Architects (Renovation)

S i n c e : 2016 (1963)

住 所 : 釜山広域市 水営区 望美洞 475-1



がらんだうの、大空間。それは工業建築物の利活用における最大の利点であり、その空間の魅力そのものであると僕は考えている。<sup>注1</sup>

<sup>写真左</sup> F1963は、ワイヤー工場であった建物を利活用し、文化活動のための場へと生まれ変わった施設である。その名は、Factoryの“F”と工場が建設された1963年に由来する。家型が連なった1万平米のがらんだうに、屋外ステージ、書店、カフェの「3つのスクエア」<sup>参考1</sup>を中心に、ギャラリーやショップ、工房などが充填されている。屋外も工場の遺構を転用しながら竹林や睡蓮池を設えており、非常に広大な施設となっている。それぞれの空間ごとに工場の空間的特徴を上手に生かしていると感じられたが、それだけでなく、ワイヤー

工場の”らしさ”も表現されている。増築物や手摺りなどはワイヤーで構築されており、屋内ではワイヤーのパーティションや、頭上に張り巡らされたワイヤーの波が空間を演出している。<sup>写真2</sup>工場利活用は現在世界中に数多くなされているが、F1963は一企業が、自工場を自前で生まれ変わらせたという点、そして、自社製の素材が空間デザインに強く表れている点で、わりと特殊な事例なのではないかと思う。

しかし、見学後なにか物足りないようにも感じてしまった。その理由は、ここが多様な空間の詰まった宝箱のような、よくできた場であるからではないだろうか。対照的なのは僕が京都で暮らしている京町家である。<sup>参考2</sup>小さいながら、文字通りが



らんだうのミセの間があり、その時々によって自由に使える良さがある。F1963は企業と建築家の協働により、精練された空間計画がなされているのは間違いないが、何にも満たされていない、自由で創造性に満ちた”がらんだう”の空間は、実は少ないのではないだろうか。さらにパリやブルックリンでの工場利活用なども比較し、それぞれの違いを思索するのも良いかと思うが、紙面の都合上ここで筆を擱くことにする。

(くぼた・たかよし)

注1) 筆者はニューヨークのブルックリンの工業建築物の利活用について研究を行なっている。

注2) 筆者は2018年8月より1年間パリに留学しており、その期間中でも工業建築物の利活用について調査を行なっている。

<参考文献>

1) F1963, <http://www.f1963.co.kr/en/> (閲覧日 2020/03/22)

2) 久保田匠慶「きよやまちやをめぐる縁」*traverse20* 2020.2

<https://www.traverse-architecture.com/20-4-2> (同上)

# Yonggungsa Temple 海東龍宮寺

## DATA

Keywords : 伝統建築、海岸、彩色

設計 : 不明

Since : 1376 (1974 再建)

住所 : 釜山広域市 機張郡 龍宮ギル 86



昼下がり、一行を乗せたバスは細長い釜山の市街地によく別れを告げつつ、山に穿たれた隧道をくぐり抜ける。ほどなくして下車すると、湿気と多少の塩気を含んだやわらかい風が肌をなでてくる。ここは釜山の東郊外にある海東龍宮寺、文字どおり海のそばにある寺で、そのロケーションの良さから一大観光名所になっている。土産物街を抜けると、石でできた十二支像たちの出迎えを受ける。小ぢんまりとした門をくぐり、石積み塀の坂道を下り、これまた石材で覆われた岩窟を進んだ先の出口で視界に飛び込んでくるのは、荒々しい岩の海岸と龍宮寺の伽藍である。外洋からそのまま押し寄せる波が、灰色の岩の連なりにしぶきを上げ、伽藍はその上方に少し距離を

置いて海に対峙している。その在り方は、同じ海のものそばとはいえ、瀬戸内の厳島神社にみられる穏やかな海と浜辺で共存するようなそれとは全く異なる。参道沿いに多用されていた石材は、この地で大量に採れる石を使ったものだろうし、そのことがこの風景の伏線をなしているようにも思われる。

伽藍に近づいていくと、足元の灰色の岩場と好対照をなすような、エメラルドグリーンを基調とする極彩色にいろどられた組物が目に入る。精巧な模様がびっしりと描かれ、内部も同じような色づかひの提灯が天井を覆っている。この日は曇天、空も海も濁っていたこともありいっそう鮮やかに見えたこの色づかひは「丹青」とよばれ、陰陽五



行に基づいた朝鮮の伝統的なものだそうだ。その彩度の高さはもちろん、とにかく細かなものの繰り返しで全体を満たすことで、観る者を圧倒している。

本堂の脇に地下へと続く階段があった。下りてみると洞窟のようなその中にあるのは「石井薬水」とよばれる湧水である。暗闇の中、蠟燭が煌々と灯す明かりは、その足元の石の台の上に延ばされた水の膜に反射して美しい。絶えざる波音と風音、そして人々の喧騒に包まれていた龍宮寺だったが、ここだけには静寂があった。

(なかむら・ふみひこ)

## Busan Cinema Center 映画の殿堂

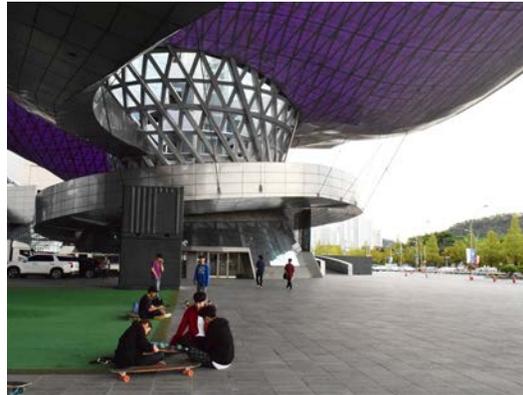
### DATA

Keywords：映画祭、スケボー、脱構築

設 計：COOP HIMMELB(L)AU

S i n c e：2011

住 所：釜山広域市 海雲台区 水宮江辺大路 120



コープ・ヒンメルブラウ設計の映画の殿堂は遠くのバスの車内から見ても存在感を放っていた。映画の殿堂は釜山国際映画祭の開催場所であり、大規模イベントを開催できるスケールを持つと共にオフィス機能や展示機能を持つ。波打つ大屋根の下では若者たちがスケートボードの練習に勤しんでおり、その大空間を自分たちの空間にしていた。釜山の地元の人々に日常使いされている建築であることを感じた。その奥では釜山国際映画祭の準備が行われており、大屋根下の屋外空間に多くの椅子を並べる作業が着々と進んでいた。

大屋根に吊られた空中歩道からは川の向こうの高層マンションが立ち並ぶ街並みを眺めることができ、その曲がりくねったプロムナードを歩くと

まるで釜山の街の中を自由に空中散歩しているようであった。内部にはエッジの効いた吹き抜けや違うフロアから望めるショップもあり、飽きることなく内部を見学することができた。日が沈むと大屋根はスクリーンとなりカラフルな光を放っていた。夕方に到着したため、展示スペースなど見学できない箇所が何箇所があったのでまた訪れる機会があれば昼夜共に訪れてみたいと思う。大屋根根の下の空間が春夏秋冬、時間帯でどのような使われ方をしているかにも興味がある。

この映画の殿堂の横には世界最大のデパートストアである新世界百貨店があり、釜山が国際都市であることを痛感させられた。

釜山国際映画祭の準備が進む中、映画祭のス

ケールを許容する大空間を使いこなす地元の人々の姿を見ることができた。脱構築という現代建築の前衛的なデザインは釜山の人々の生活に入り込みながら、映画都市として釜山を世界へと導いている。

(おおはし・まりな)

# 今日の釜山めし

## ー朝食 (ホテルにて)ー

キムチ  
しめじと玉ねぎの炒め物  
スクランブルエッグ

## ー昼食ー

ミルジョン  
シュウマイ  
キムチ (白菜、唐辛子、大根、薄い蒲鉾など)

## ーおやつー

ホットク (穀物と蜜を絡め、包み揚げたもの)

## ー夕食ー

サムギョブサル  
鶏の唐揚げ (辛いのと甘いタレのもの)  
丸焼き  
ばくだん酒

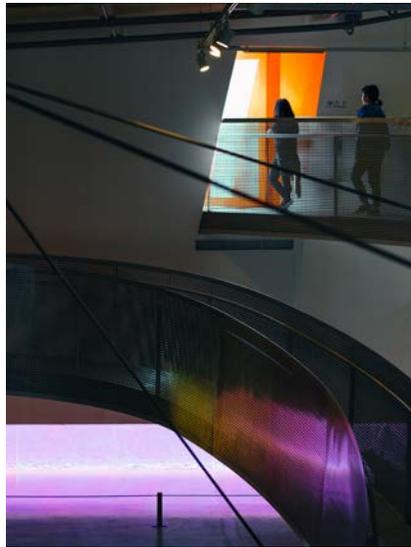


昼食は二度目のミルジョンである。この長い麺は初めにハサミで十字に切ること、朝鮮戦争の際にピョンヤンから逃れてきた難民たちによってもたらされたということを2日目にしてジョン先生から教わる。十字に切ると格段に食べやすい。また麺はスープを吸ってか柔らかく、小麦の味が強く、より食べ馴染みのある感じがした。



夕食は海運台市街にてサムギョブサルである。タレに漬け込んだ豚を、店員さんが焦げないように手際よく焼いていく。たまらない匂いの煙をあげて肉が焼けるのを前に、店員さんが頷くまで待った。香ばしいタレをまとい、脂身は甘く肉は柔らかく旨い。骨付き肉は鉄板の隅に置きじっくり焼き上げる。焦げ付いたタレの香りと凝縮された甘みが、骨周りのほろほろした肉と一緒に味わいもたまらない。ご飯が進んでしょうがなかった。

(あめみや・みか)



神吉研究室  
釜山調査旅行

— 旅程 —

9.26 (木)

集合まで自由行動  
(草梁イバグギル・国際市場 等)

13:30 ホテル発

16:30 金海国際空港発

17:55 関西国際空港着

DAY 3



# Choryang Ibagugil 草梁イバグギル

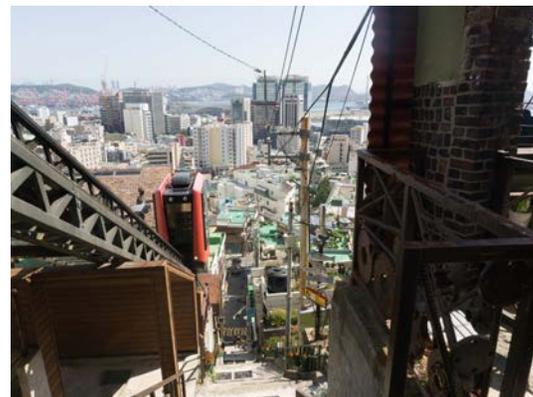
## DATA

Keywords：階段、斜面地居住、朝鮮戦争

設計：

Since：

住所：釜山広域市 東区 草梁洞



釜山の市街地は、山塊と湾の間を縫うようにして細長く広がっている。したがってその縁は山裾になるわけだが、釜山の特徴は、概して急傾斜なのにもかかわらず山裾のかなり上の方まで宅地化されていることである。どうして人々は急斜面に住まざるを得なかったのか。これには釜山の歴史が関係していた。

釜山滞在最終日、草梁（チョリャン）の山裾に向かって出発した。いちばんの目玉は、その長さで名をさせる「168 階段」である。釜山駅前のホテルから、距離にすれば大したことはないから、歩いて行く。中心市街を走る幹線道路から山側に折れていくと商店街に入るが、さっそく地面が少し傾いている。歩みを進めるごとに住宅街の色彩が濃くなり、徐々に傾きが増す。途中、転げ落ちそうな角度の斜面に、何台もの車が平

然と止められているから驚くばかりであった。住宅街では地震の少なさから煉瓦造が多いことや、理由はわからないが建物外壁や塀が主にパステル色に塗装されること、しばしば家屋の瓦屋根が青や緑のモルタルでコーティングされていることなど、日本との違いが見てとれた。斜面上は区画整理されず、細い路地や階段が迷路のように張り巡らされている。迷い込み何度も同じ道を行き来した挙句、「168 階段」の下にようやく辿り着いた。見上げると遥か遠くに点のような階段の終わりが見える。階段の下というよりは麓である。

この 168 階段、その長さのインパクトはもちろんあるが、朝鮮戦争の避難民が階段下の井戸で水を汲み、苦勞して水を運び上げたという歴史が背景にある。戦

争当時、北朝鮮方面からの進軍により北から順に町々が陥落していった。朝鮮半島南東端に位置する釜山は韓国の最後の砦となり、多くの避難民が逃げ場を求め移動してきた。彼らはどれほど土地条件が悪かろうが、急斜面を住み処とするよりしかたなかったのである。

階段を喘ぎながら登りきり振り返ると、工業化し発展した釜山港のコンビナートやタンカーが遠くに見えた。思い出すのは前日、臨時首都記念館で見た戦時中のビデオに映されていた、日本からの物資輸送船の荷役に従事する肉体労働者。彼らもあの港にいたはずだ。疲れという身体感覚に触発され、人々が必死に生き抜いた当時の釜山が、ぼんやりと脳裏に浮かび上がった。

（なかむら・ふみひこ）



今日の



めし

ー朝食 (ホテルにて)ー

みそ汁  
キムチ

ー昼食ー

キンパ (海苔巻き)  
トッポギ

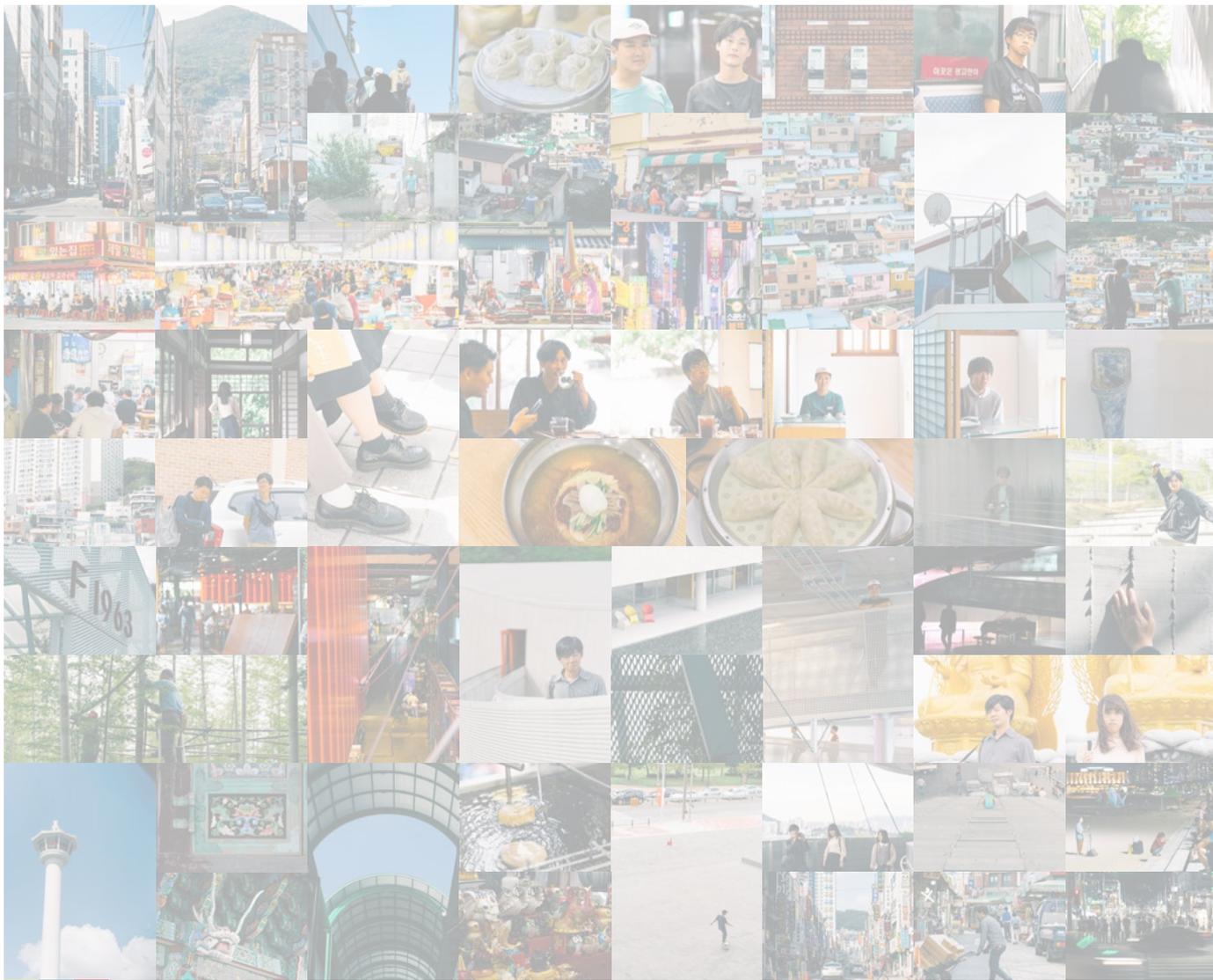
3日目の昼食は国際市場で調達する。財布を売る店の一画の総菜屋で、まずキンパを買った。全体のごまごま油の味付けで、食欲を刺激される。ごはんは硬めで酢飯のような酸味はなく、具もゴボウやホウレンソウで、日本の海苔巻きとは随分ちがった味わいだった。

食品街ではトッポギも食べた。うどんより太い、小さい角餅くらいの太さで、食感もちもちした団子に近い。赤くてややとろみのある汁に、他に太いネギと薄い蒲鉾が入っている。このトッポギの太さでやっとな辛いスープを食べられる。ただし辛いとはいえ、ネギも蒲鉾もなんなればトッポギも、味がわかるので不思議だ。

その時分になると、店と店の間の裏路地からも、昼食を作るごま油やだしの匂いが漂ってきた。市場の人々は店番の傍ら、腰かけなにやら食べていて、いかにも穏やかな昼下がりだった。

(あめみや・みか)





神吉研究室  
釜山調査旅行記  
2019.9.24 - 26

2020年3月発行

発行  
神吉研究室

編集  
中村文彦  
大橋茉莉奈  
新靖雄

旅行企画  
中村文彦

旅行参加者  
神吉紀世子  
太田裕通  
清山陽平  
山口直人  
久保田匠慶  
成原隆訓  
山地崇博  
大橋茉莉奈  
新靖雄  
中村文彦  
雨宮美夏  
奥村拓哉  
高山夏奈

Spetial Thanks  
田泰宇 (Jeon Tae-woo) 先生